

図4 自覚症状ありの者の割合、性別、年齢別

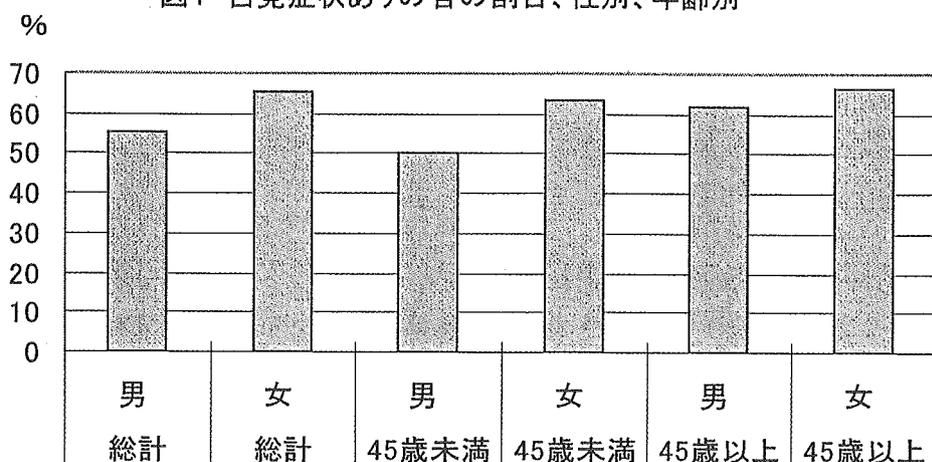


図5 自覚症状ありの者の割合(自覚症状の種類別)、性別、年齢別

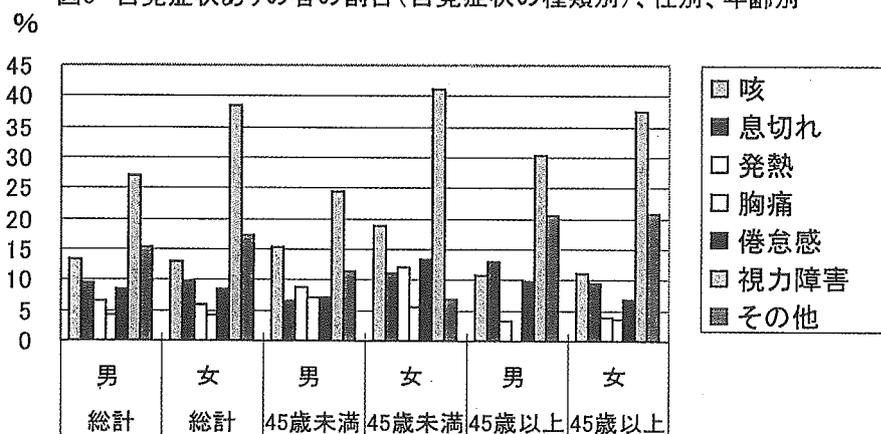


図6 眼所見ありの者の割合、性別、年齢別

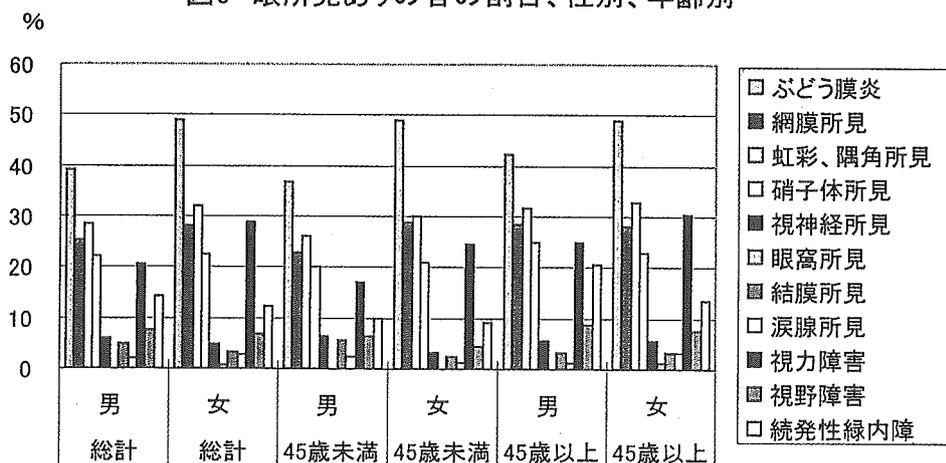


図7 胸部所見ありの者の割合、性別、年齢別

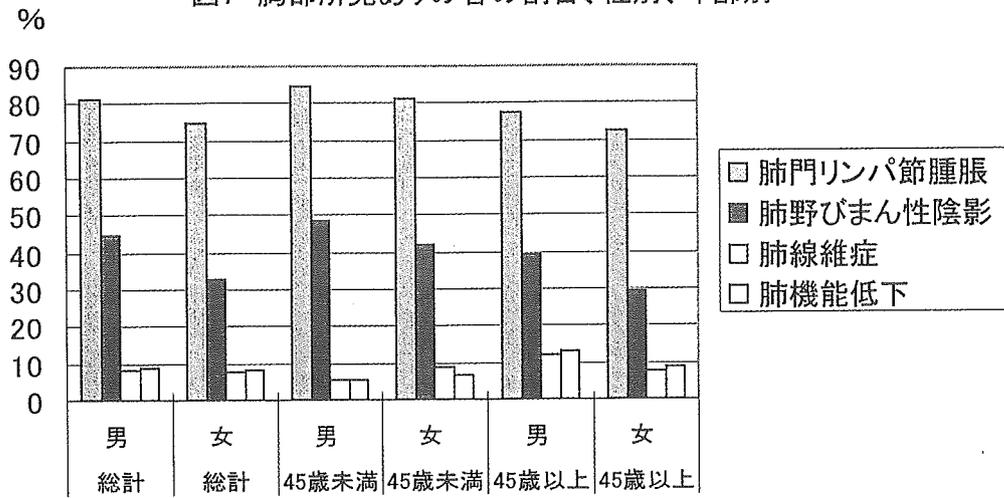


図8 心臓所見ありの者の割合、性別、年齢別

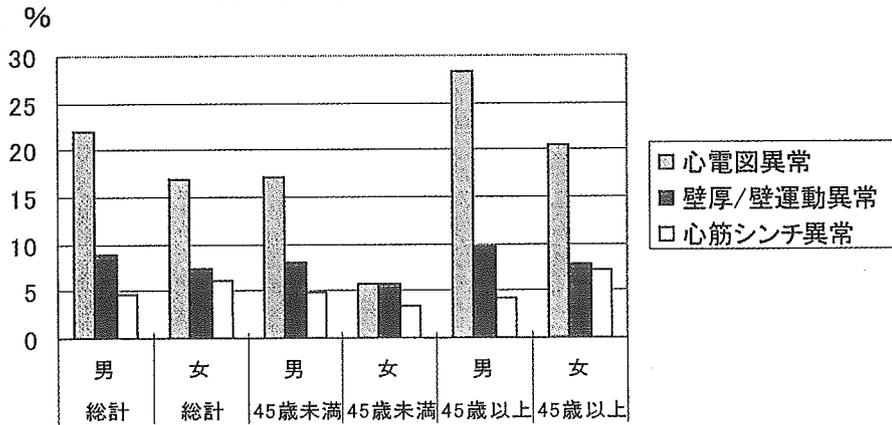


図9 皮膚所見ありの者の割合、性別、年齢別

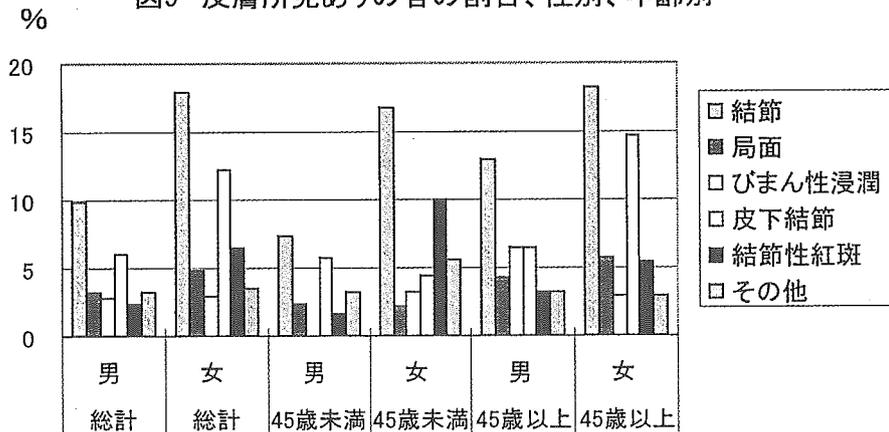


図10 サルコイド肉芽腫ありの者の割合、性別、年齢別

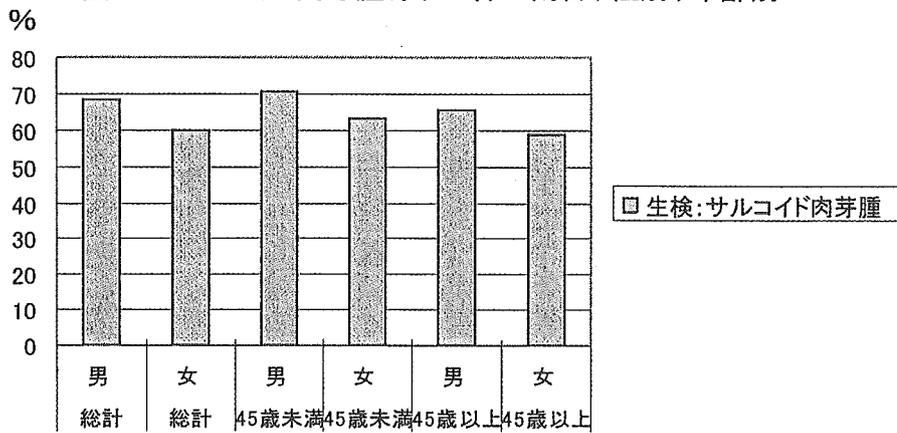


図11 検査所見ありの者の割合、性別、年齢別

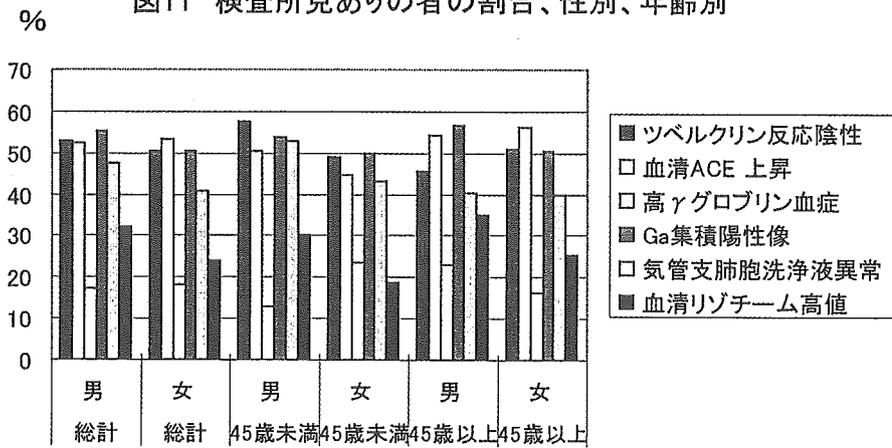
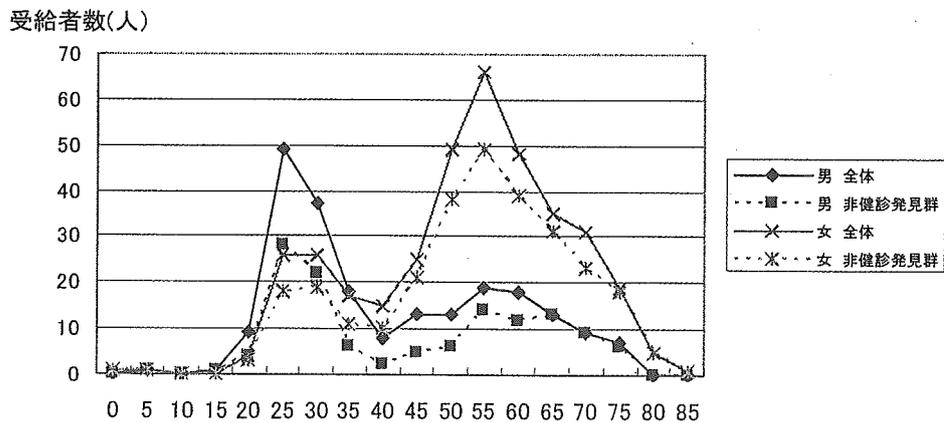


図12 非健診発見群の性・年齢分布



潰瘍性大腸炎の疫学像－臨床調査個人票を用いた解析

仁科基子、太田晶子、柴崎智美、石島英樹、泉田美知子、永井正規
(埼玉医科大学公衆衛生学)

研究要旨

特定疾患医療受給者の臨床調査個人票データを用い、潰瘍性大腸炎の受給者の性・年齢分布、発病時年齢、発病後期間、臨床分類（臨床経過、臨床的重症度、病変の拡がり）を明らかにした。対象は2004年度12月現在に新様式個人票に入力済みの2003年度受給者34,072人（男18,051人、女16,021人）とした。受給者の年齢分布は男女とも30-34歳にピークがあり、若年者から高齢者まで分布していた。80歳未満では各年齢において男の方が女より受給者数が多かった。特に、20歳代、40歳代では男は女に比べ受給者数が多かった。発病時年齢分布は男女とも25-29歳にピークがあり、20代から30代で約45%を占めているが、高齢で発病している者も多い。2003年度に発病した発病後1年未満の受給者もほぼ同様の発病時年齢分布を示したが、やや高齢であった。受給者の臨床経過は、初回発作型16%、再燃緩解型48%、慢性持続型29%、急性電撃型0.6%、不明2%であった。発病後1年未満の者は77%が初回発作型、発病後5年以上では再燃緩解型が約55%、慢性持続型が約30%であった。女は再燃緩解型、男は慢性持続型の割合が高い傾向にあった。臨床的重症度は、軽症64%、中等度27%、重症3.5%、劇症0.2%、不明5.5%であった。病変のひろがりには直腸炎型40%、左側大腸炎型20%、全大腸炎型21%、不明19%であった。発病後2年未満の者および30歳未満の者で病変のひろがりが大きく、臨床的重症度が高かった。2003年度に発病した者も男の方が女より多く、それ以前に発病した者より重症例が多いことが明らかになった。

目的

特定疾患医療受給者の臨床調査個人票データを用い、潰瘍性大腸炎の受給者の性・年齢分布、発病時年齢、発病後期間、臨床分類（臨床経過、臨床的重症度、病変の拡がり）を明らかにする。

方法

2003年度特定疾患治療研究医療受給者

の臨床調査個人票データ（2004年度12月7日現在入力済みのもの）を利用した。

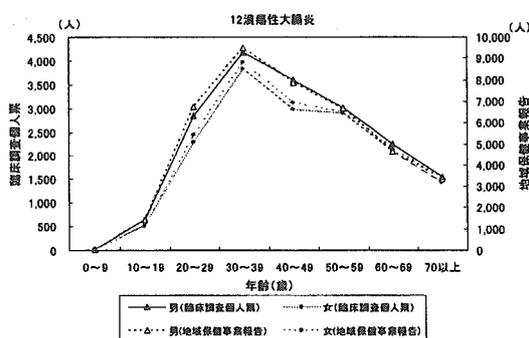
利用したデータには、個人名、住所、受療医療機関など個人を同定できる者は含まれていなかった。

1.臨床調査個人票データの妥当性の検討

臨床調査個人票の情報は都道府県によっては入力状況が悪く、利用したデータは地

域保健・老人保健事業報告(保健事業報告)による 2003 年度 潰瘍性大腸炎特定疾患医療受給者証所持者数 77,170 人の 44%であった。臨床調査個人票データと 1997 年度受給者調査報告、2003 年度保健事業報告(ともに全数報告)と比較した結果、臨床調査個人票による性・年齢分布の形は保健事業報告とほぼ一致していた。(図 1)したがって、今回利用したデータは受給者全体の状況を反映していると考え、臨床像の解析に利用した。

図1. 臨床調査個人票による受給者数、2003年度地域保健事業報告との比較



2. 対象および集計方法

新様式個人票に入力された 2003 年度受給者全てについて潰瘍性大腸炎の臨床分類(臨床経過、臨床的重症度、病変の拡がり)を性・年齢階級別、発病後期間別に集計した。また、2003 年に罹患した者の状況を把握するため発病後 1 年未満の受給者を別に集計した。

結果

調査票に入力された潰瘍性大腸炎の受給者 34,072 人(男 18,051 人、女 16,021 人)のうち新規受給者は 7.4%、更新受給者は 92.6%であった。

1. 年齢分布および発病時年齢分布

受給者の年齢分布は男女とも 30-34 歳にピークがあり、若年者から高齢者まで分布していた。80 歳未満では各年齢において

男の方が女より受給者数が多かった。特に、20 歳代、40 歳代では男は女に比べ受給者数が多かった。

受給者の発病時年齢分布は男女とも 25-29 歳にピークがあり、20 代から 30 代で約 45%を占めているが、高齢で発病している者も多い。2003 年度に発病した発病後 1 年未満の者もほぼ同様の発病時年齢分布を示したが、やや高齢であった。(図 2)

2. 発病後期間

発病後 1 年未満の受給者は 2,197 人(男 1,241 人、女 956 人)で受給者の 6.4%であった。新規受給者の 60%が発病後 1 年未満であった。

受給者の平均発病後期間は 8.3 年、男 7.9 年、女 8.7 年であった。男は女に比べて発病後期間が短い者が多く、発病後期間が 10 年以上の者は女に多かった。(表 1、図 3)

3. 臨床分類

表 2 に全受給者と発病後 1 年未満の受給者の臨床分類(臨床経過、難治性、臨床的重症度、病変の拡がり)の割合を性別に示した。

(1) 臨床経過

受給者の臨床経過は、初回発作型 16%、再燃緩解型 48%、慢性持続型 29%、急性電撃型 0.6%であった。性・年齢階級別にみると初回発作型の割合は 30 歳未満の者で高く、再燃緩解型の割合は 30 歳から 70 歳代の女性で高かった。(図 4)発病後期間別にみると発病後 1 年未満の受給者の 77%が初回発作型だった。発病後 5 年以上では再燃緩解型が約 55%、慢性持続型が約 30%であった。女で再燃緩解型、男では慢性持続型の割合が高い傾向にあった。

(図 5)

(2) 臨床的重症度

受給者の調査時の臨床的重症度は、軽症 64%、中等度 27%、重症 3.5%、劇症 0.2%、不明 5.5%であった。性・年齢階級別にみ

ると 30 歳未満の者で重症度が高かった。また男の方が女より重症度が高かった。(図 6) 発病後期間別にみると発病後 2 年未満の者で重症度が高かった。(図 7)

発病後 1 年未満の受給者の臨床的重症度は、軽症 41%、中等度 46%、重症 10%、劇症 0.8%、不明 1.8%であった。30 歳未満の者、65 歳以上の者で重症度が高く、男の方が女より重症度が高かった。(図 8)

(3) 病変のひろがり

最近の罹患部位による病変のひろがりには直腸炎型 40%、左側大腸炎型 20%、全大腸炎型 21%、不明 19%であった。性・年齢階級別にみると 30 歳未満の者に全大腸炎型の割合が高く、病変の拡がりが大きかった、また男の方が女より病変の拡がりが大きかった。(図 9) 発病後期間別にみると発病後 2 年未満の者で病変の拡がりが大きかった。(図 10)

発病後 1 年未満の受給者の病変のひろがりには直腸炎型 40%、左側大腸炎型 21%、全大腸炎型 38%、不明 2%であった。全大腸炎型の割合は男 41%、女 33%であり、男の方が女より病変の拡がりが大きく、30 歳未満の者、65 歳以上の者で病変の拡がりが大きかった。(図 11)

考察

2003 年度の潰瘍性大腸炎医療受給者の性・年齢分布、発病年齢分布、発病後期間、臨床分類(臨床経過、臨床的重症度、病変の拡がり)の割合を明らかにすることができた。

2002 年度の患者調査にもとづく総患者数は約 6 万人、性比(男/女)は 0.96 で女の方がやや多い。本研究の受給者の性比は 1.13、新規受給者では性比 1.35 であり、男が多かった。2003 年度に発病した受給者

も男の方が女より数が多く、重症度も高いことが明らかになった。医療受給者の場合、軽症例は新規に医療受給を受けない、また受給を受けていた者でも緩解により受給中止する場合が考えられるため、患者調査の結果や日常診療の場と比較すると軽症例は含まれていないことを考慮する必要がある。

臨床調査個人票には予後に関する情報はないが、臨床経過等から、男は初回発作時において重症例が多く、その後も慢性持続型の経過をとる者が多く、女は再燃緩解型の経過をとる者の割合が高く、男に比べ、発病後期間は長いが比較的軽症例の割合が高いのではないかと推察された。

今後、医療受給者の推移について検討し、潰瘍性大腸炎の有病率、罹患率について考察したい。

文献

- 1) 永井正規, 太田晶子, 仁科基子, 柴崎智美編: 電子入力された臨床調査個人票に基づく特定疾患治療研究医療受給者調査報告書. 厚生労働科学研究難治性疾患克服研究事業 特定疾患の疫学の疫学に関する研究班, 2005.
- 2) 永井正規, 淵上博司, 仁科基子, 他編: 特定疾患治療研究医療受給者調査報告書(1997 年度分) その 1. 基本的集計. 厚生科学研究特定疾患対策研究事業 特定疾患の疫学に関する研究班, 2000.
- 3) 厚生労働省大臣官房統計情報部編: 平成 15 年度 地域保健・老人保健事業報告 閲覧(地域保健編) 保健所表
- 4) 厚生労働省大臣官房統計情報部編: 平成 14 年 患者調査(全国編) 財団法人 厚生統計協会

表1. 発病後期間(年)、性、新規・更新区分別

	受給者合計			新規受給者			更新受給者		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
受給者数(人)	34,072	18,051	16,021	2,513	1,445	1,068	31,559	16,606	14,953
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
発病後期間(年)									
0 (1年未満)	6.4	6.9	6.0	60.3	59.4	61.5	2.2	2.3	2.0
1	8.0	8.4	7.5	8.4	8.8	8.0	7.9	8.3	7.4
2	7.6	7.8	7.4	4.4	3.9	5.1	7.9	8.2	7.5
3	6.9	7.6	6.2	2.9	3.3	2.2	7.3	7.9	6.5
4	6.5	6.7	6.2	1.8	2.1	1.3	6.8	7.1	6.6
5-9	26.3	26.2	26.5	7.6	7.3	8.1	27.8	27.8	27.8
10-14	16.5	16.1	17.0	4.3	4.2	4.4	17.5	17.1	17.9
15-19	8.9	8.5	9.4	2.1	2.1	2.0	9.5	9.1	10.0
20-	7.5	6.3	8.8	2.2	2.3	2.1	8.0	6.7	9.4
不明	5.2	5.6	4.9	6.0	6.5	5.2	5.2	5.5	4.8
発病後期間(年)の平均	8.3	7.9	8.7	2.4	2.5	2.4	8.7	8.3	9.2

図2. 受給者の調査時年齢分布および発病時年齢分布、性別

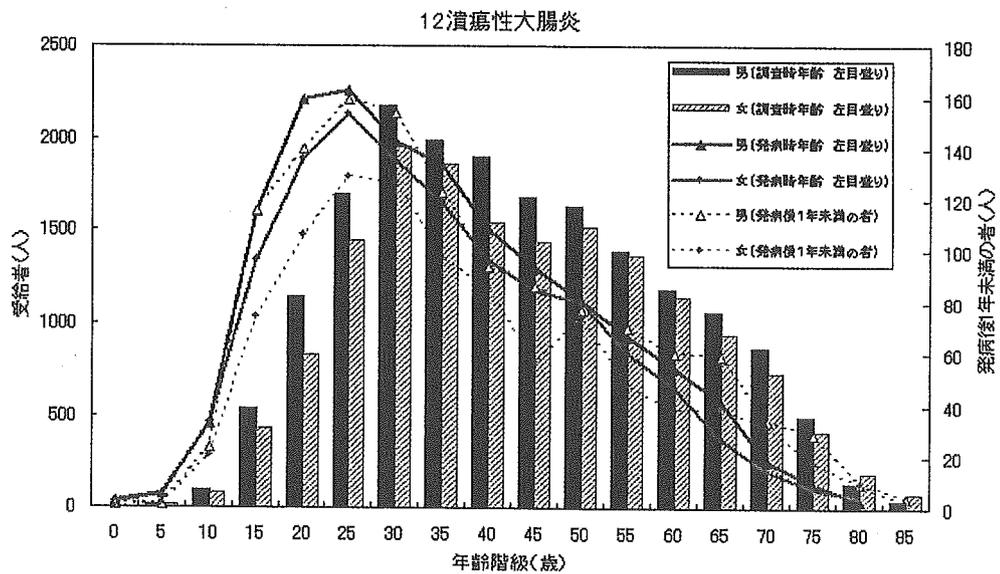


図3. 発病後期間(年)、性、新規・更新区分別

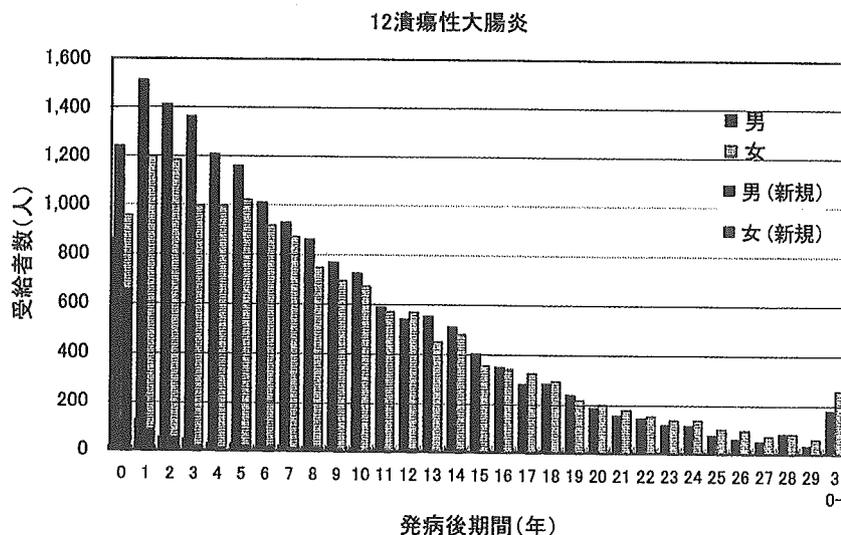


表2. 臨床分類

受給者数(人)	受給者合計			発病後1年未満の受給者		
	総数	男	女	総数	男	女
	34,072	18,051	16,021	2,197	1,241	956
	100%	100%	100%	100%	100%	100%
臨床経過 (複数回答)						
1.初回発作	15.5	16.3	14.6	77.3	77.4	77.1
2.再燃緩解	48.1	46.5	49.9	7.6	7.8	7.2
3.慢性持続	29.3	29.9	28.7	11.0	10.2	12.0
4.急性電撃	0.6	0.7	0.5	0.6	0.8	0.3
5.不明	2.0	2.1	1.9	2.8	3.2	2.3
臨床的重症度						
1.軽症	64.1	63.9	64.3	41.0	39.7	42.6
2.中等度	26.7	26.6	26.8	46.2	47.2	44.9
3.重症	3.5	3.6	3.4	10.2	10.5	9.8
4.劇症	0.2	0.3	0.2	0.8	0.9	0.7
5.不明	5.5	5.6	5.4	1.8	1.7	2.0
病変のひろがり(最近の罹患部位)						
直腸炎型	39.8	38.7	41.1	39.6	37.5	42.4
左側大腸炎型	20.1	20.6	19.7	20.6	19.7	21.7
全大腸炎型	21.1	22.8	19.0	37.5	40.9	33.1
不明	19.0	18.0	20.1	2.4	1.9	2.9

図4. 臨床経過、性・年齢階級別

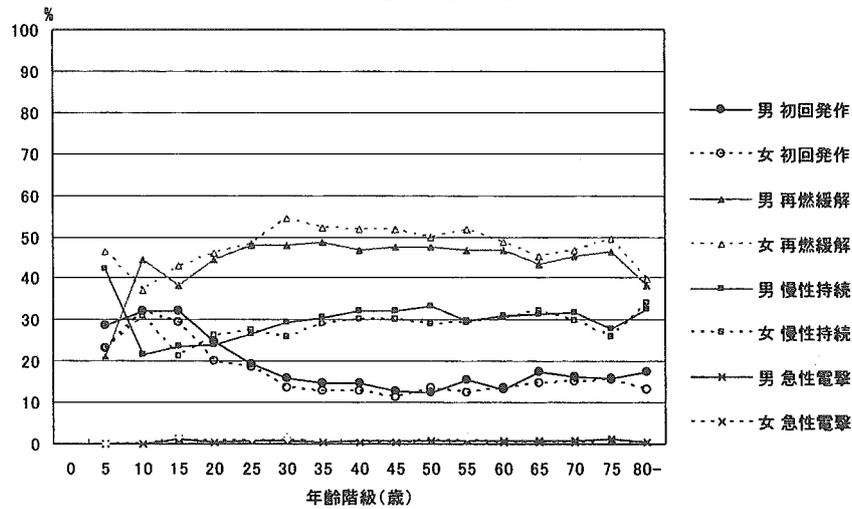
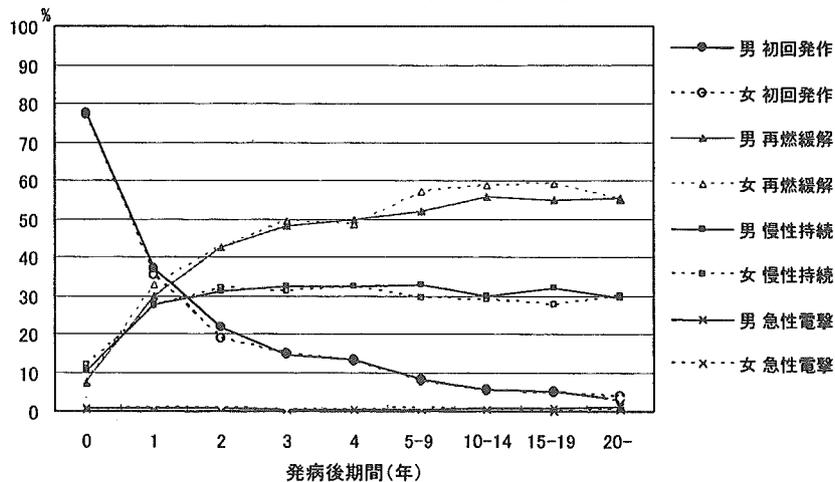


図5. 臨床経過、性・発病後期間別



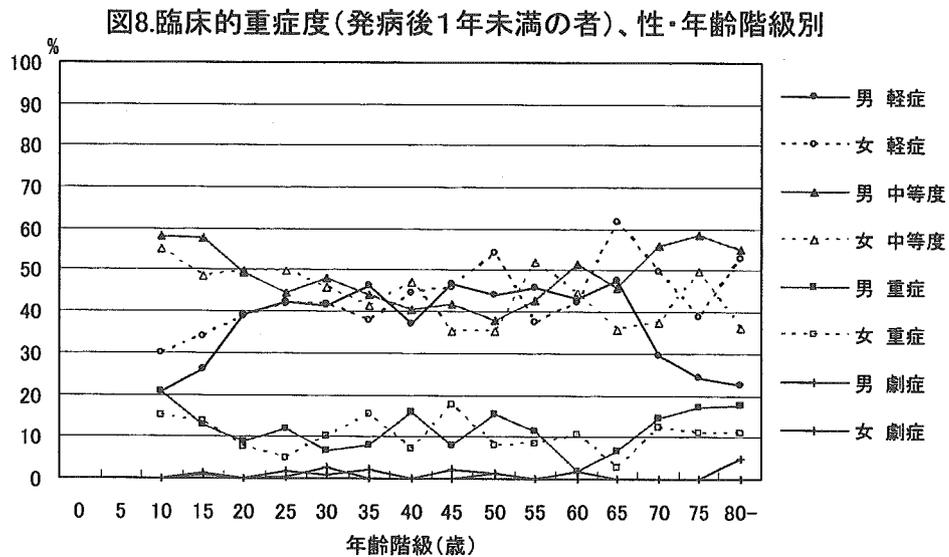
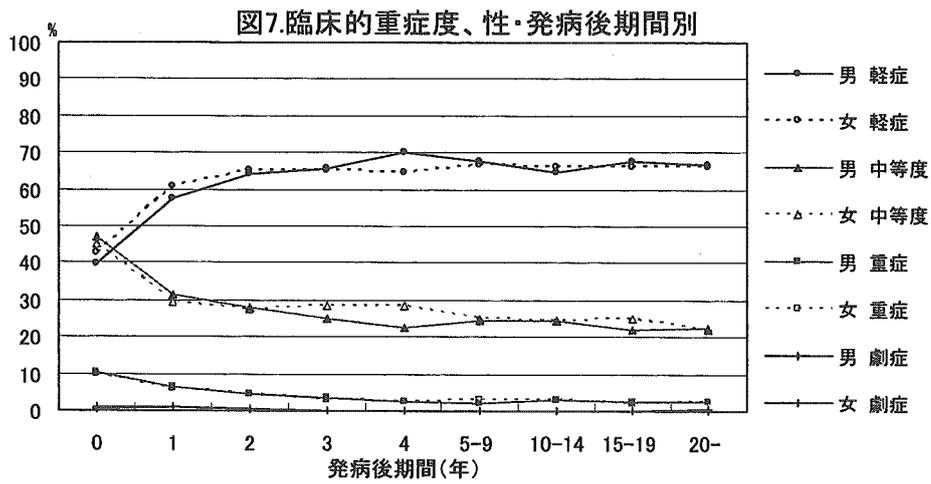
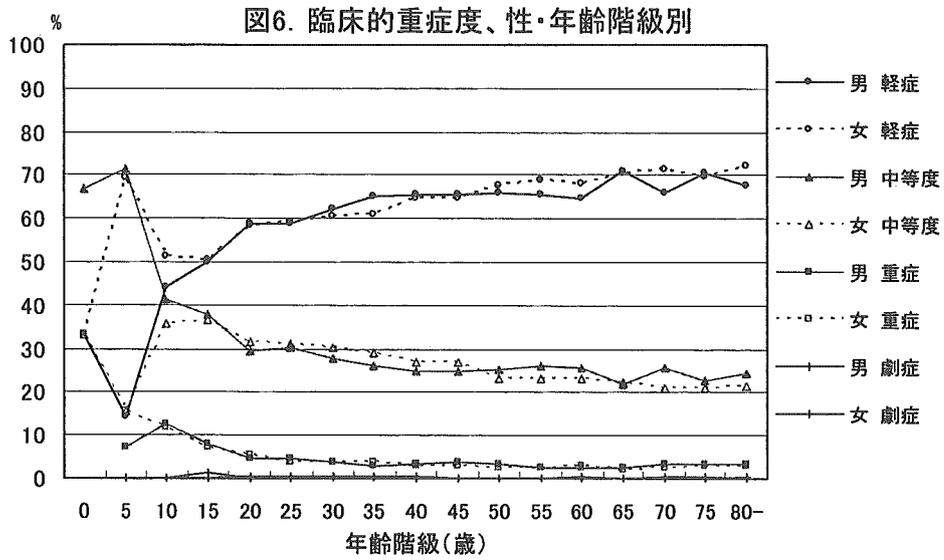


図9. 病変のひろがり、性・年齢階級別

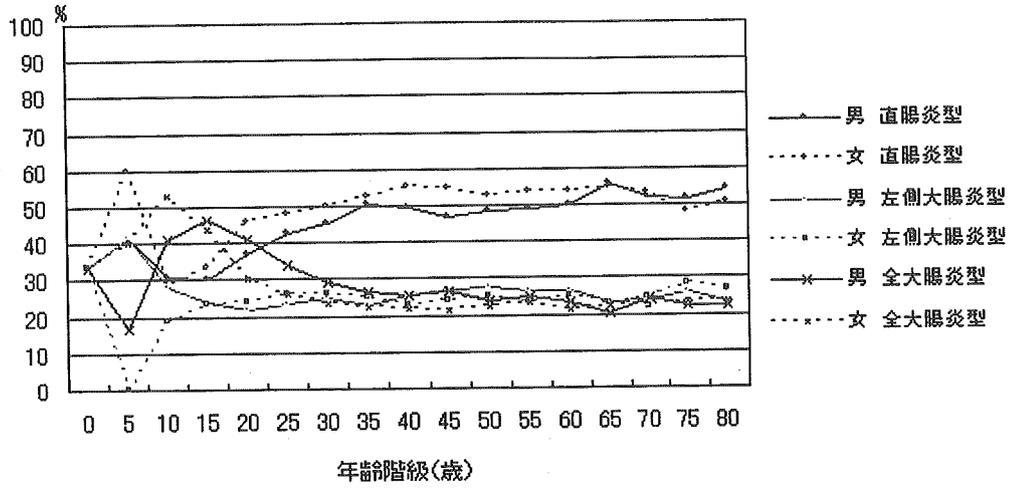


図10. 病変のひろがり、性・発病後期間別

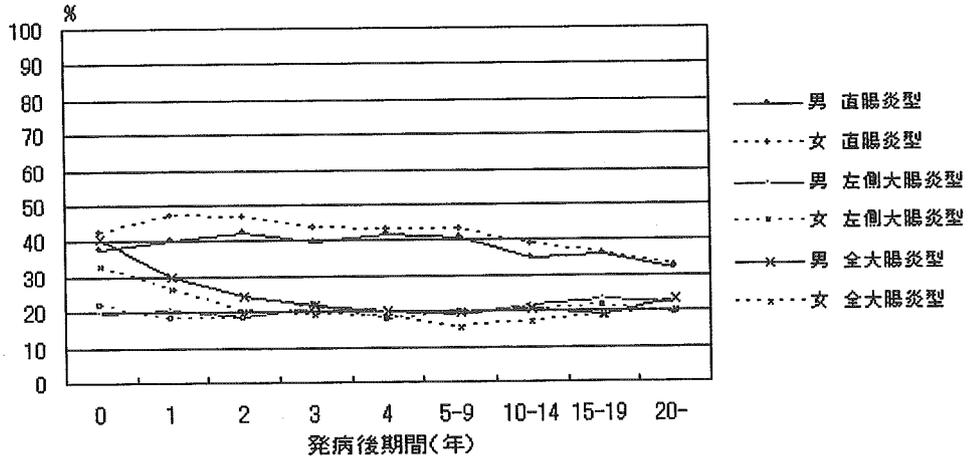
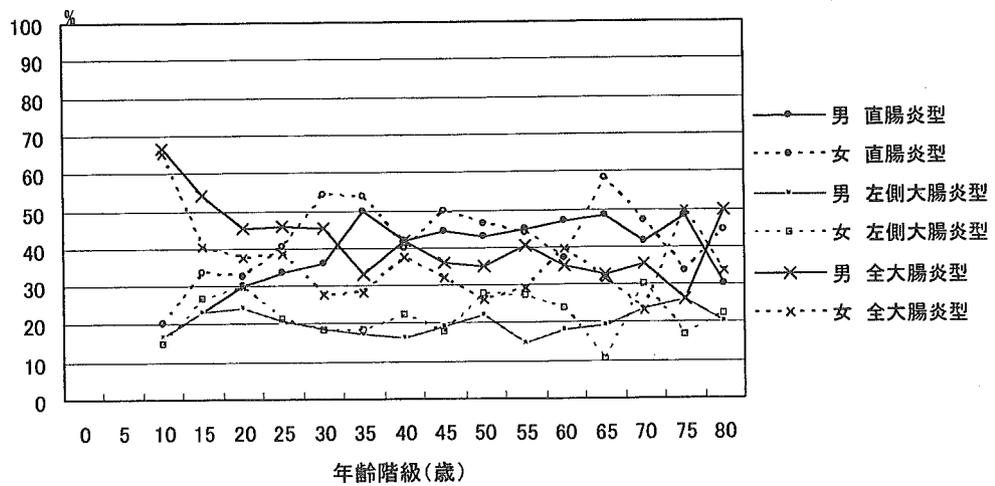


図11. 病変のひろがり(発病後1年未満の者)、性・年齢階級別



特発性血小板減少性紫斑病の臨床症状

泉田 美知子、仁科 基子、柴崎 智美、太田 晶子、石島 英樹、
永井 正規（埼玉医科大学・公衆衛生学）

研究要旨

特発性血小板減少性紫斑病（ITP）の臨床症状を、2004年12月までに電子化されたITPの2003年度臨床調査個人票12202件（新規受給者940人、更新受給者11262人）を用いて明らかにした。ITP受給者の、性・発病後期間・発病時年齢の違いによる病型・臨床症状の特徴を以下にまとめる。

病型については、発病時年齢15歳未満の受給者では急性の割合が高く、また発病時年齢にかかわらず男は女より急性の割合が高い、という特徴があった。

出血症状については、発病後5年未満の受給者は出血症状を認める割合が高く、また発病時年齢25歳未満の受給者は出血症状を認める割合が高い、という特徴があった。

具体的な症状については、男は女より歯肉出血・鼻出血・下血を認める割合が高いという性による特徴と、発病時年齢が若年の受給者は紫斑・鼻出血を、高年の受給者は下血を認める割合が高い、という年齢による特徴があった。

血小板数最低値については、男は女より血小板数 <5 万/mm³の割合が高く、また発病後5年未満の受給者は血小板数 <5 万/mm³の割合が高いという特徴があった。

背景

特発性血小板減少性紫斑病（Idiopathic Thrombocytopenic Purpura:以下ITP）は特定疾患医療受給対象疾患となっており、受給者の年齢と発病時年齢の分布は、既に特定疾患の疫学に関する研究班の報告書¹⁾で報告されている。受給者数は小児では男女差はないが、20歳以降は男より女に多い（図1）。発病時年齢は男は2峰性、女は3峰性を示し、幼児（5歳未満）と中高年（男は55-65歳、女は25-30歳と45-55歳）にピークがある（図2）。

ITPは急性型と慢性型に分けられ、推定発病時または診断時から6か月以内に治癒する急性型は小児に多く、6か月以上遷延する慢性型は成人に多いことが知られている。ITP

受給者数を発病後期間別に観察すると、発病後期間が長くなると男女ともに受給者数は少なくなることが分かる（図3）。ただし男は女より発病後期間の短い者の割合が高く（図4）、性の違いによって呈する病型が異なることがうかがえる。

目的

ITPの特定疾患治療研究医療受給者の、性・発病後期間・発病時年齢の違いによる病型・臨床症状の特徴を明らかにすることを目的とする。

方法

2004年12月までに電子化されたITPの2003年度臨床調査個人票のうち、新様式（新規・

更新)の臨床調査個人票は12202件(新規受給者940人、更新受給者11262人)あった。

この12202人(男3755人、女8447人)を対象に、性別・発病後期間別に病型・臨床症状を解析し検討した。病型は急性か慢性か、臨床症状(更新受給者では最近1年以内の症状)としては、出血症状の有無、具体的な出血症状(紫斑・歯肉出血・鼻出血・血尿・下血・月経過多・脳出血の有無)、血小板数最低値(新規受給者は最近6か月以内、更新受給者は最近1年以内の最低値)を集計した。

さらに発病時の臨床症状を明らかにするために、受給者12202人のうち発病年が2003年以降の1016人(男454人、女562人)を対象として、発病時年齢別に病型・臨床症状を解析し検討した。

結 果

<病型>

- ①受給者12202人の病型は慢性が多い(85.4%)が、性別に病型をみると急性の割合は男が女より高かった(男17.36%、女9.81%)(表1)。
- ②発病後5年未満の受給者は5年以上に比べて急性が占める割合が高く、また発病後5年未満の受給者では男は女より急性が占める割合が高かった(男30.8%、女19.2%)(図5)。
- ③発病年が2003年以降の受給者1016人について病型を発病時年齢階級別にみると、発病時年齢が15歳未満は急性の占める割合が特に高く、15歳未満は受給者の84.8%が急性だった。また、ほとんどの年齢階級で急性の割合は男は女より高かった(図6)。

<出血症状の有無>

- ①受給者12202人の42.6%に出血症状を認めしたが、出血症状を認める者の割合は性差はなかった(男43.0%、女42.4%)(表2)。
- ②発病後5年未満の受給者は出血症状を認める割合が最も高い(49.3%)が、発病後20年以上の受給者も高かった(図7)。

③発病年が2003年以降の受給者1016人の出血症状の有無を発病時年齢階級別にみると、発病時年齢25歳未満では出血症状を認める割合が特に高かった(男75.0-100%、女71.4-95.8%)(図8)。

<具体的な出血症状>

- ①受給者12202人の具体的な出血症状をみると、最も多くみられた症状は紫斑38.4%、次いで歯肉出血9.0%、鼻出血8.2%であった。男が女より認める割合が高いのは歯肉出血(男10.0%、女8.5%)・鼻出血(男10.5%、女7.2%)・下血(男2.7%、女1.4%)であった(表3)。
- ②各症状と発病後期間の関係を観察した(図9-15)。紫斑・歯肉出血・鼻出血は発病後0-4年と発病後20年以上の受給者に認める割合が高かった。また発病後期間に係わらず、歯肉出血・鼻出血は男に認める割合が高かった。脳出血を認めるのは、発病後期間が短い者ばかりではなかった(図15)。
- ③発病年が2003年以降の受給者1016人の具体的な出血症状を、発病時年齢階級別に観察した(図16-22)。紫斑は発病時年齢20歳未満で多く認め(88.4%)、また20歳未満では紫斑を認める割合は女より男に多かった(図16)。発病時年齢が若年の者に多く認める症状は紫斑・鼻出血であり、高年の者に多く認める症状は下血であった(図16.18.20)。月経過多は、発病時年齢20-30歳代ではおおよそ20%、40代でおおよそ30%に認めた(図21)。

<血小板数最低値>

- ①受給者12202人で血小板数<5万/mm³の者の割合は48.2%であった。受給者の男は女より血小板数<5万/mm³の割合が高かった(男51.7%、女46.6%)(表4)。
- ②発病後0-4年の受給者は血小板数<5万/mm³の割合が高く、また、発病後期間にかかわらず受給者の男は女より血小板数<5万/mm³の割合が高かった(図23)。

③発病年が2003年以降の受給者1016人について血小板数最低値を発病時年齢階級別にみると、発病時ほどの年齢階級でも血小板数<5万/mm³の割合(77.0-95.2%)が高かった(図24)。

考 察

ITP受給者において、男は女より歯肉出血・鼻出血・下血を認める割合が高いという性による特徴と、発病時年齢が若年の受給者は紫斑・鼻出血を、高年の受給者は下血を認める割合が高い、という年齢による特徴が認められた。これらの特徴は今まで明らかにされていなかった事実である。ただしこれらの症状はITPに特異的な症状ではなく、(症状の出現頻度はITP受給者で多いと考えられるが)ITP受給者以外でも性や年齢による同様の特徴が認められる可能性があることは留意すべきである。

結 論

ITP受給者について、性・発病後期間・発病時年齢の違いによる病型・臨床症状の特徴が明らかになった。今回の研究結果は、今まで教科書的に知られていたITP患者の臨床的特徴に多くは合致するものであったが、臨床的特徴を性別・年齢別に具体的な数字で提示できたことに意義があると考ええる。

文 献

1) 永井正規、太田晶子、仁科基子、柴崎智美：電子入力された臨床調査個人票に基づく特定疾患治療研究医療受給者調査報告書。2005年3月

研究発表

学会発表

1. 泉田美知子、仁科基子、柴崎智美、太田晶子、石島英樹、永井正規：特発性血小板減少性紫斑病の臨床症状、第16回日本

疫学会学術総会。2006. 1.

知的財産の出願・登録状況 (予定を含む)

- | | |
|-----------|----|
| 1. 特許取得 | なし |
| 2. 実用新案登録 | なし |
| 3. その他 | なし |

表1: ITP受給者の病型、性別

性	病型			計
	急性	慢性	記載なし	
男	652 (17.4%)	2997 (79.8%)	106 (2.8%)	3755 (100%)
女	829 (9.8%)	7426 (87.9%)	192 (2.3%)	8447 (100%)
計	1481 (12.1%)	10423 (85.4%)	298 (2.4%)	12202 (100%)

表2: ITP受給者の出血症状の有無、性別

性	出血症状の有無			計
	出血有り	出血無し	記載なし	
男	1615 (43.0%)	2051 (54.6%)	89 (2.4%)	3755 (100%)
女	3581 (42.4%)	4642 (55.0%)	224 (2.7%)	8447 (100%)
計	5196 (42.6%)	6693 (54.9%)	313 (2.6%)	12202 (100%)

表3: ITP受給者の具体的な出血症状、性別

性	紫斑あり	歯肉出血あり	鼻出血あり	血尿あり
男	1396 (37.2%)	377 (10.0%)	395 (10.5%)	108 (2.9%)
女	3288 (38.9%)	721 (8.5%)	606 (7.2%)	223 (2.6%)
計	4684 (38.4%)	1098 (9.0%)	1001 (8.2%)	331 (2.7%)

性	下血あり	月経過多あり	脳出血あり	その他の症状あり	計
男	102 (2.7%)		15 (0.4%)	118 (3.1%)	3755 (100%)
女	120 (1.4%)	445 (5.3%)	18 (0.2%)	174 (2.1%)	8447 (100%)
計	222 (1.8%)	445 (5.3%)	33 (0.3%)	292 (2.4%)	12202 (100%)

表4: ITP受給者の血小板数最低値、性別

性	血小板数最低値			計
	$\text{Plt} < 5 \text{万} / \text{mm}^3$	$5 \text{万} \leq \text{Plt} < 50 \text{万} / \text{mm}^3$	その他	
男	1942 (51.7%)	1726 (46.0%)	87 (2.3%)	3755 (100%)
女	3939 (46.6%)	4314 (51.1%)	194 (2.3%)	8447 (100%)
計	5881 (48.2%)	6040 (49.5%)	281 (2.3%)	12202 (100%)

図1 ITP 受給者数、性・年齢階級別

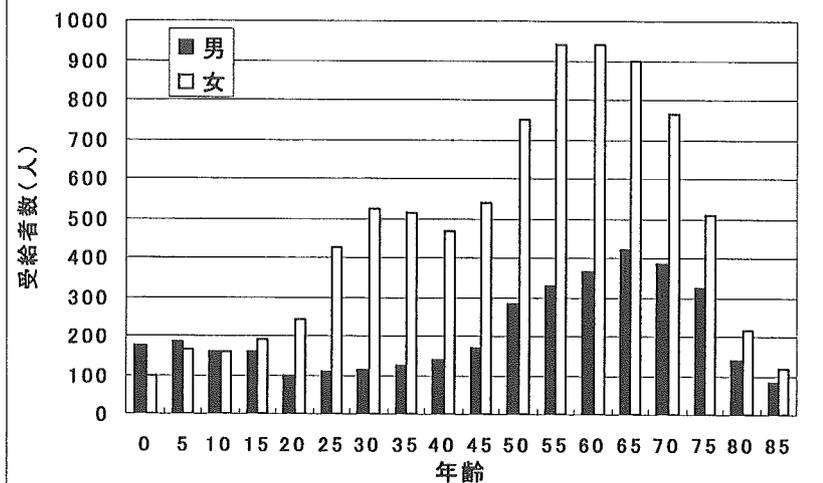


図2 ITP 受給者数、性・発病時年齢階級別

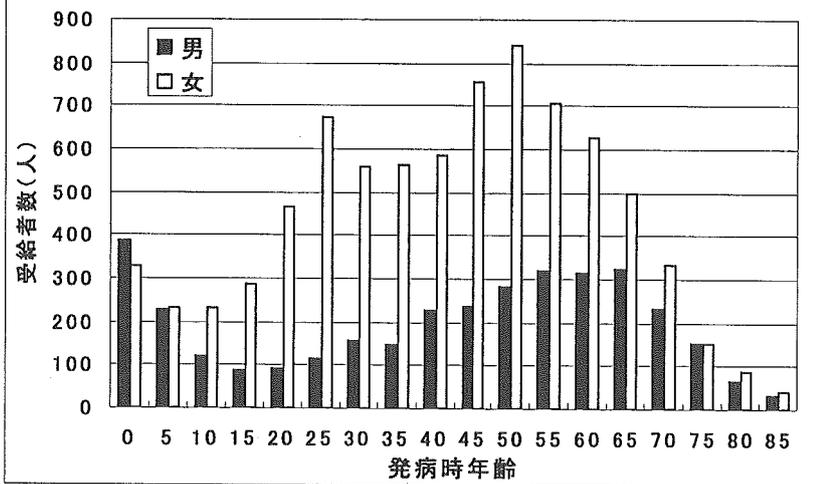
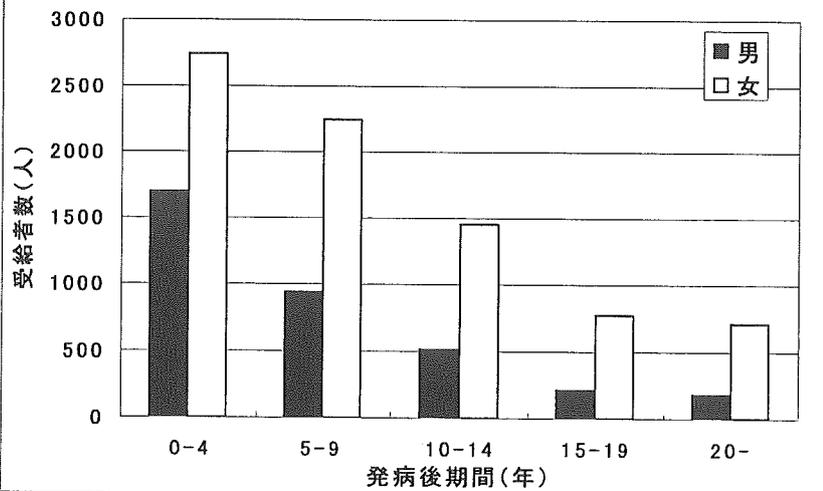
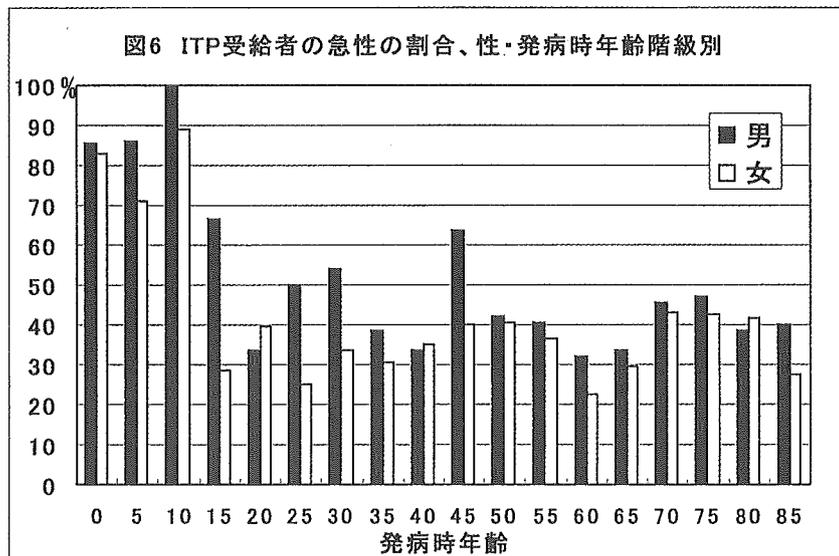
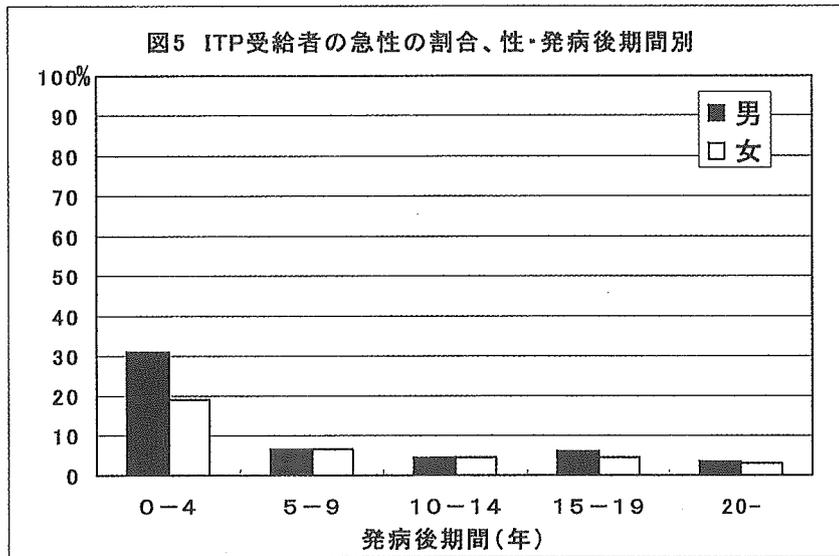
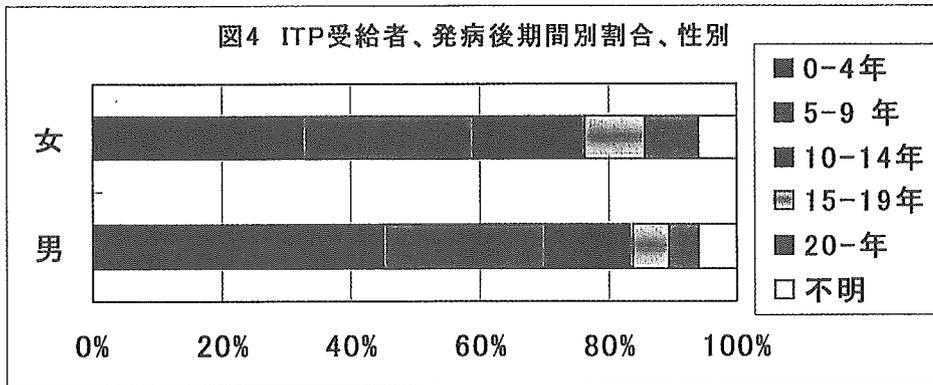


図3 ITP 受給者数、性・発病後期間別





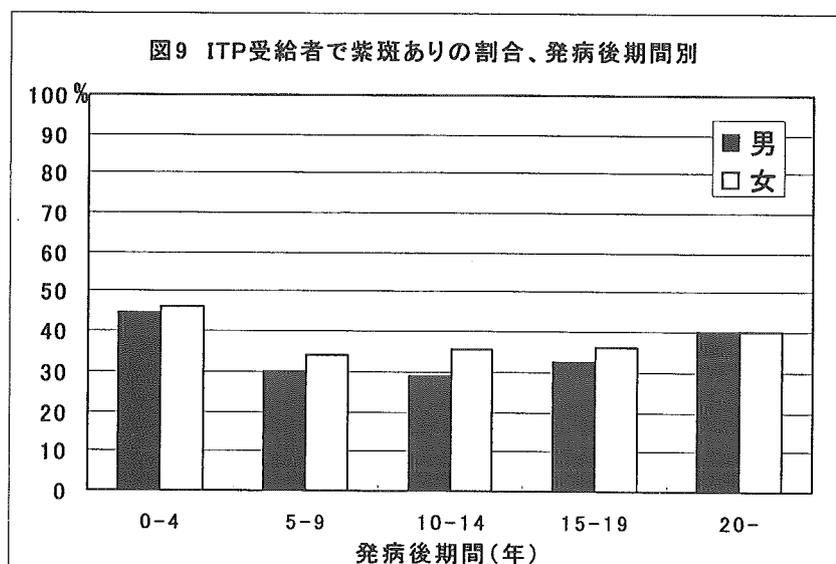
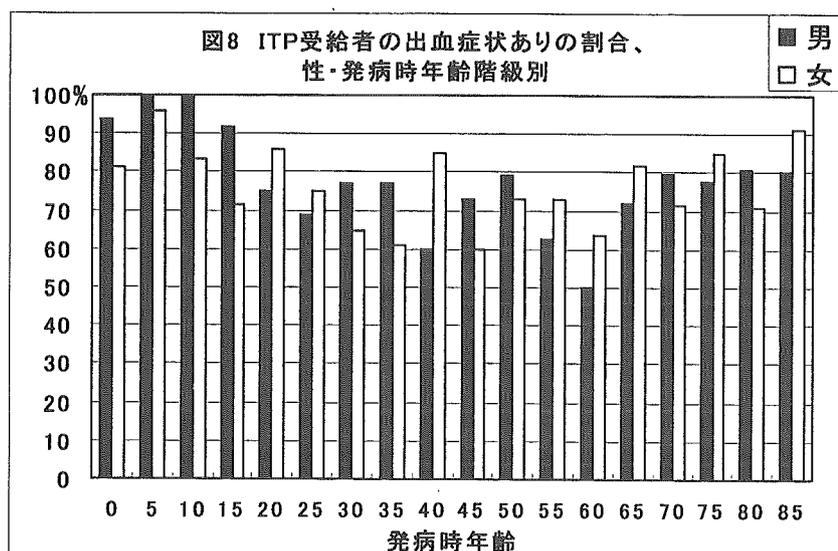
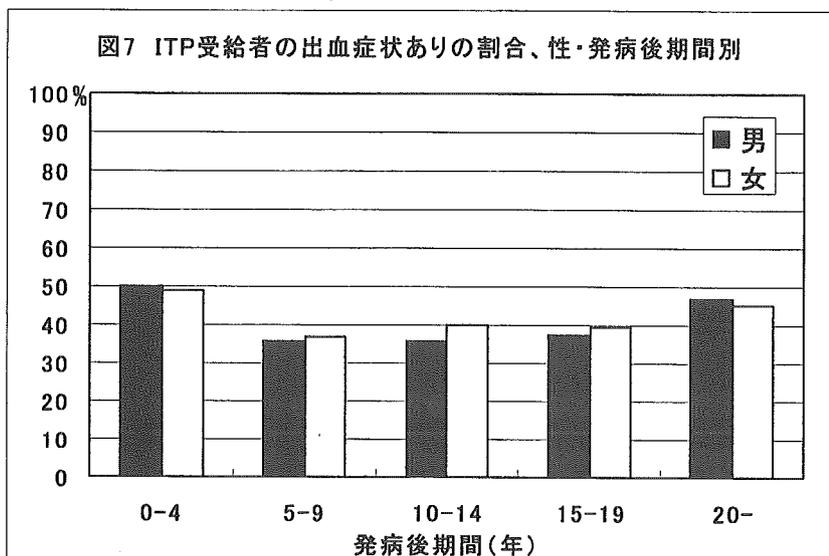


図10 ITP受給者で歯肉出血ありの割合、発病後期間別

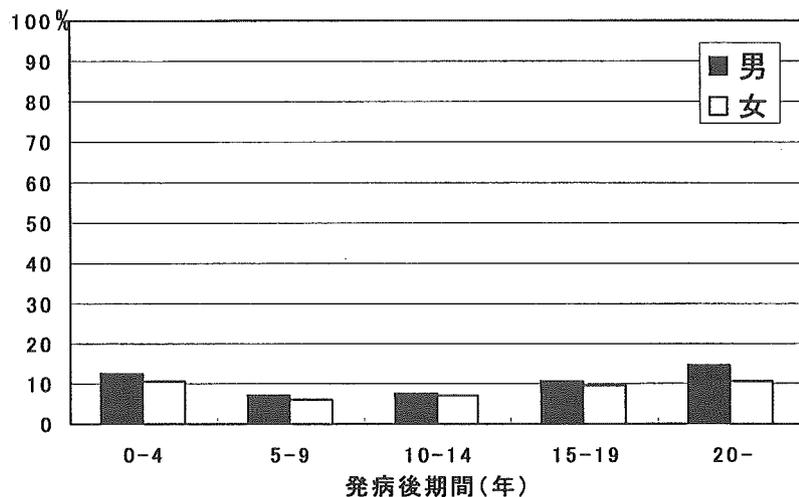


図11 ITP受給者で鼻出血ありの割合、発病後期間別

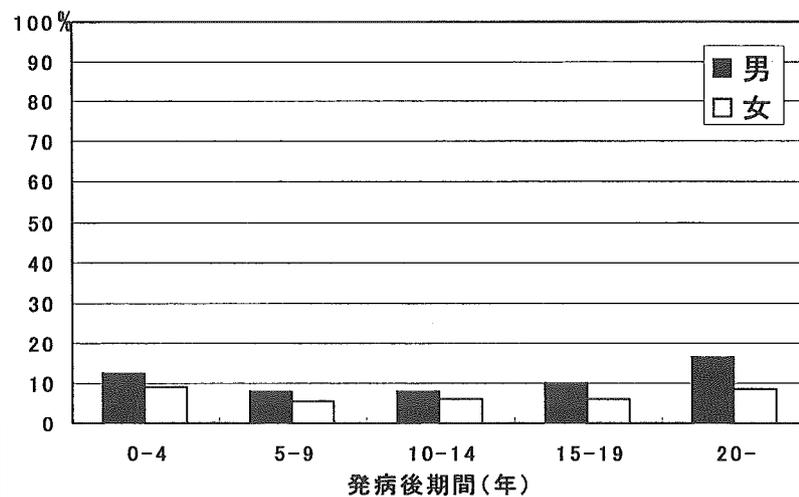


図12 ITP受給者で血尿ありの割合、発病後期間別

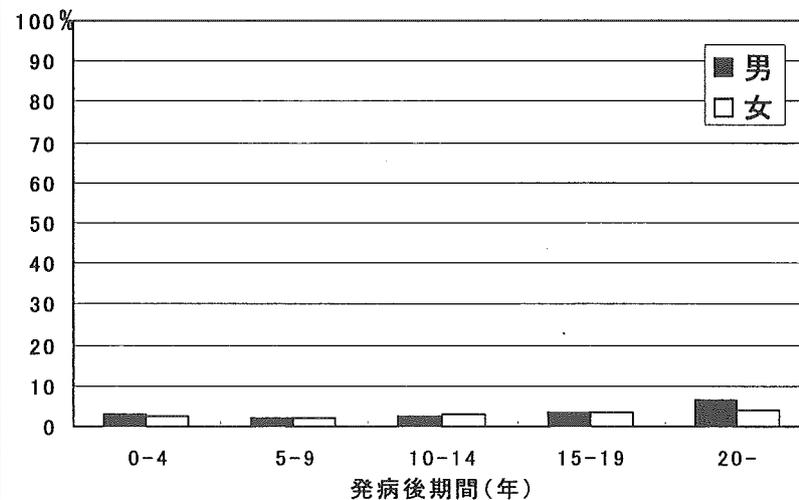


図13 ITP受給者で下血ありの割合、発病後期間別

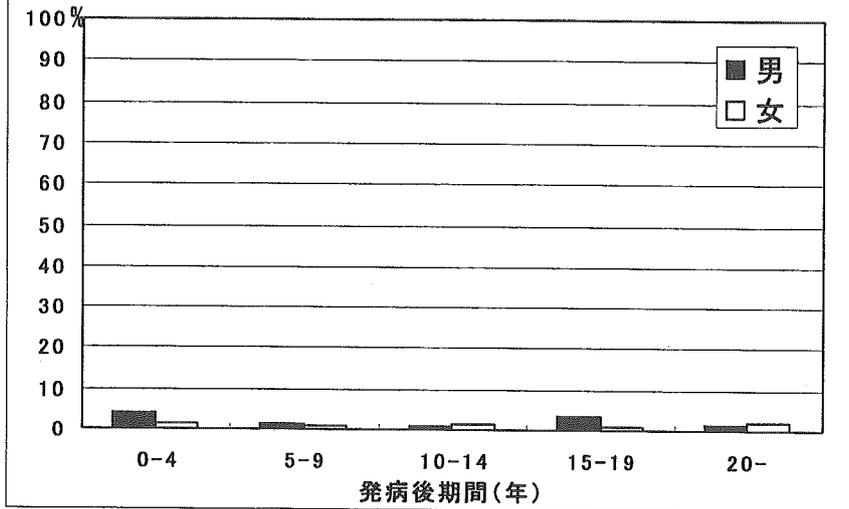


図14 ITP受給者で月経過多ありの割合、発病後期間別

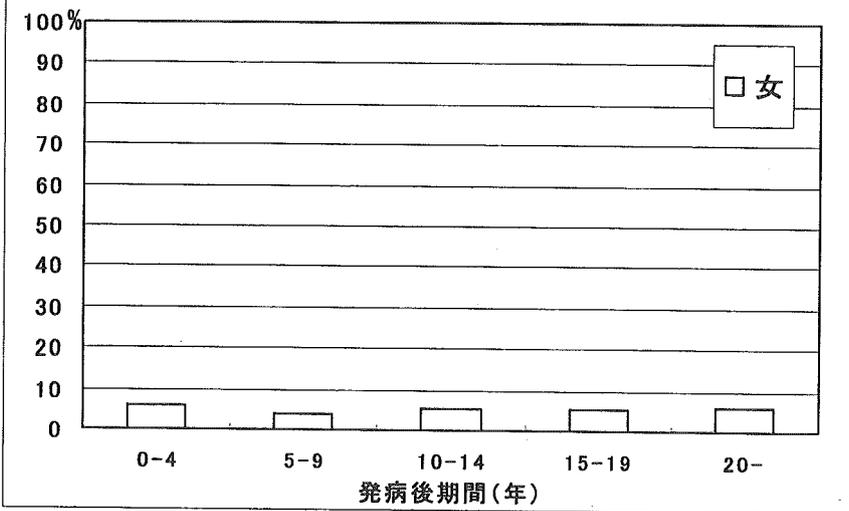


図15 ITP受給者で脳出血ありの割合、発病後期間別

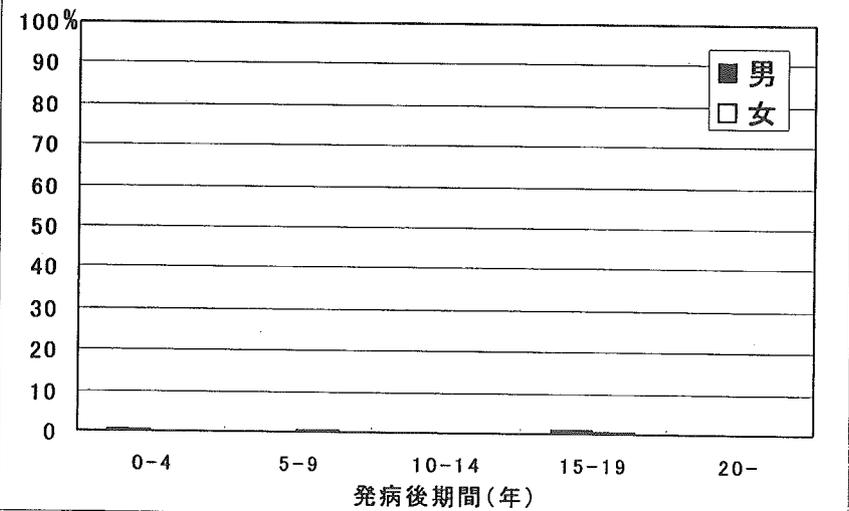


図16 ITP受給者で紫斑出血ありの割合、
発病時年齢階級別

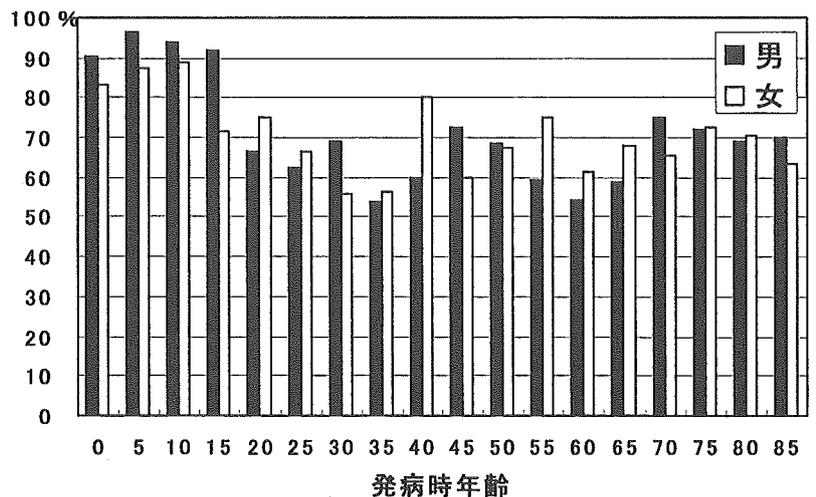


図17 ITP受給者で歯肉出血ありの割合、
発病時年齢階級別

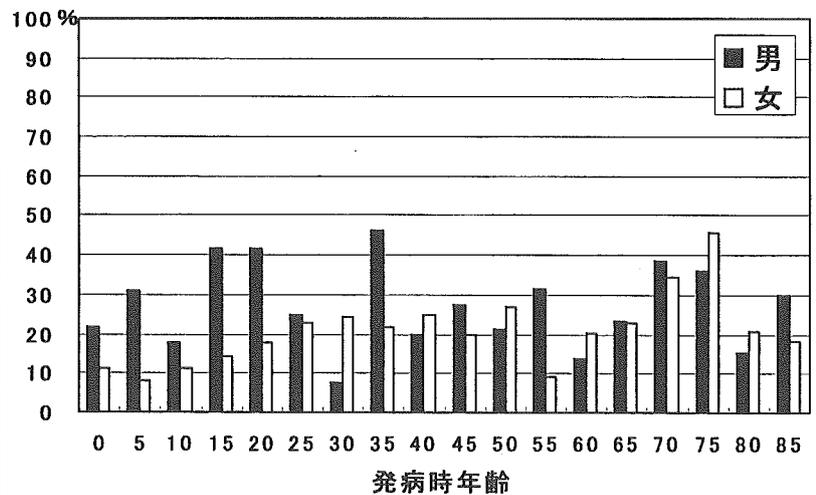


図18 ITP受給者で鼻出血ありの割合、
発病時年齢階級別

